

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

「現代世界の分断と共生の検討：イスラーム・ジェンダー学のアプローチから」

2024 年度第 4 回研究会

日 時：2024 年 12 月 15 日（日）15:00-18:00

場 所：本郷サテライト 3F セミナールーム／オンライン

報告者：幸加木文（立教大学、AA 研共同研究員）

内 容：

司 会：岡戸真幸（大東文化大学・上智大学、AA 研共同研究員）

報告 1：細谷幸子（国際医療福祉大学、AA 研共同研究員）

「イラン手話公用語化への道：イスファハーンろう者家族協会のアドボカシー活動とろう者のエンパワーメント」

報告 2：細田和江（AA 研フェロー）

「イスラエルにおける社会的弱者とジェンダー」

全体討論

第 4 回研究会では、細谷幸子氏と細田和江氏による報告がなされた。細谷氏の「イラン手話公用語化への道：イスファハーンろう者家族協会のアドボカシー活動とろう者のエンパワーメント」と題する報告では、イランをフィールドとする研究者で医療者でもある細谷氏がろう者の調査をすることになった経緯を説明し、障害者政策や運動の理解にはそれぞれの政策上の障害区分や障害の原因等を踏まえることが必須であるとの問題意識を提示した。次に、イランで使用される手話には大きく分けて指文字、人工手話であるペルシャ語対应手話、そして自然言語であるイラン手話の 3 種類が存在するとし、近年はイラン手話を公用語として認定しようという動きがあり、ろう者を手話という独自の言語を持つ「言語的マイノリティ」として捉えるべきとした。しかし、現状では独自の文化を持つアイデンティティ集団として社会的に認められておらず、ろう者に向けられるオーディズムと呼ばれる様々な差別や偏見の問題を指摘した。手話を公式言語化する目指す動きについては、イラン手話とペルシャ語対应手話のどちらを公用語として推奨するかに関し立場の相違があり、ろう者・難聴者個々の能力や置かれた環境、コミュニケーション方法の多様さゆえに、統一的に制度化を目指す運動が困難である点が指摘された。さらに、イランにおけるろう者の識字教育において、当事者の必要や利便性よりも政治の都合が重視され、インクルーシブ教育等により手話を習得するための機会そのものが減少し教育や就労支援が不十分であるとした。細谷氏は、ろう者が直面する多様かつ難しい論点に批判的検討を加えつつ、いかにエンパワーメントが可能なのかという視点を随所に織り交ぜながら論じた。質疑では、イスラームの観点から音に関する感覚や比較評価についての質問に、クルアーンやハディースを典拠としてろう者や手話が肯定されること、基本的政策や収集されるデータ、思想や歴史的背景等が異なる他地域との比較の困難さについて説明があった。

細田氏は「イスラエルにおける社会的弱者とジェンダー」と題して、ガザ戦争を続けるイスラ

エルにおいて「社会的弱者」にあたる人々に関する問題を、ジェンダーの観点を踏まえて多角的に論じた。まず、イスラエルにおける「社会的弱者」とは同国内及びパレスチナ自治区のパレスチナ人、非ユダヤ教徒、非ヨーロッパ諸国からの新移民、LGBTQ、女性などが該当すると指摘した。家庭内暴力や男性親族による女性への「名誉殺人」の増加、諸外国からの女性の就業支援が限定的である状況等を挙げ、こうした問題に対する支援例として、家庭内暴力をふるわれる女性への保護活動の状況をドキュメンタリー映画の事例を引きながら解説した。その他の社会的弱者への支援については、LGBTQ へのヘイトクライムに対する抗議デモ、シリア内戦から逃れた難民への支援、女性支援団体の活動等がある反面、これらにはピンクウォッシュ、シリア難民とパレスチナ人への対応の差異、「強者」としての女性像から除外される女性の問題等があるとした。イスラエルという「ユダヤ性」を最優先する国家が抱える根本的問題が未解決であるがために、パレスチナ人を始めとする社会的弱者の巡る諸問題が生じる構造を指摘した。総じてイスラエルはジェンダー公正を重視する一方で、社会の不公正を看過しており、他方でパレスチナは社会の公正を重視する一方で、ジェンダー不公正を看過しているとして、公正さの追求が困難である状況を論じた。質疑では、パレスチナ女性への就業支援やシリア難民支援を巡る諸派の動向についての質問の他、イスラエルにおけるフェミニズムやLGBTQ 支援には非／反インターセクショナル리티の側面がありアイデンティティ・ポリティクスの限界が指摘されるとともに、この議論は差別の受けやすさという意味での「vulnerability」や排外主義、パレスチナ人の身体的能力を奪う弱体化等の論点にも繋がるとのコメントがあった。

全体討論では、多文化主義等の米国を始めとする他国の議論に照らしたイランにおけるろう者のアイデンティティの社会的認知の状況や、「ユダヤ教徒」という共通項を重視するイスラエルゆえの諸問題とジレンマ、ろう者の国際組織の存在や活動、読唇を優先しようとする非当事者に対するろう者の反対、ろう者に関する様々な統計や置かれた環境の問題などについて活発な質疑応答が行われた。最後に、「障害」という本来アラビア語にはない近代に作り出された言葉によって差別が生み出される社会構造を問う問題意識と、自由な社会参加を保障する仕組みをいかに作り差別を乗り越えていくかについて、当研究会で検討された概念を用い具体的事例を挙げて議論していくことの重要性が提起された。その乗り越えていく仕組みとしてエンパワーメントを実施するアクターの問題、インクルーシブ教育の問題性等が指摘された。